

一八九二年のルネ・ヴォルムス『スピノザの道德 その原理とそれが現代におよぼした影響の検 討』に至る、実証主義におけるスピノザ受容の歴史 的概観

著者	近藤 和敬
雑誌名	鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集
巻	88
ページ	15-29
発行年	2021-02-16
URL	http://hdl.handle.net/10232/00031569

一八九二年のルネ・ヴォルムス『スピノザの道徳——その原理とそれが現代におよぼした影響の検討』に至る、実証主義におけるスピノザ受容の歴史的概観

近 藤 和 敬

1. 二つの異なる文脈の運動とそこから逸脱する特異点

本稿¹が目指すのは、二〇世紀におけるフランス・エピステモロジーの伏流としてのスピノザ研究²で示されたスピノザ解釈における文脈

1 本論者は、上野修編『スピノザと十九世紀フランス』（岩波書店、二〇二一年予定）に所収の「第8章 ヴィクトル・デルボスによるスピノザ解釈の特異性——一八九〇年代の文脈の比較において」と題された論文の前半部として、とくに実証主義におけるスピノザ受容について論じたものだが、紙幅の関係上、同一論文として掲載することができなかったため、その前半部分をここに掲載するものである。したがって、ここに掲載するのは、一八九〇年代に存在する二つの異なる文脈のうちの一つとしての実証主義のそれである。また、本稿の執筆にあたって、近藤和敬「一八九〇年代における『スピノザの道徳』という主題設定について——デルボス、プランシュヴィック、ヴォルムス」の一部を加筆修正して利用している。

2 科学研究（基盤B）「フランス・エピステモロジーの伏流としてのスピノザ」（上野修代表：2013-2016）。当該研究についての成果として上野修・

の源流を、十九世紀にまでさかのぼって明らかにすることで、そこでの研究を補完し、また同時に十九世紀前半のフランスとドイツのそれぞれでのスピノザ哲学の与えた影響関係とのあいだに連絡路の手がかりを探ることである。このことの意義のひとつは、単純に哲学的意義に加えて、ひとつの哲学がある程度以上の集中度で読み直されるときに、どのような心的力学が働くのかということを解明することに与することにあり。このことは、また哲学解釈の線形的な進歩というしばしば前提されるが、かならずしも説得的ではない一般観念にたいして懐疑的な証拠を提供する。マテリアルとしては同一のテキストにたいして、それをどう読むか、ということは、そのテキストがどのような文脈のなかで読まれるか、ということの意味するということを、以下の議論は示唆しているように思われる³。そしてその文脈は、ときに相互に絡み合っているし、派生関係や位相的な変換関係におかれるものもあるが、そ

米虫正巳・近藤和敬編『概念の倫理・主体の論理——二〇世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』以文社、二〇一七年がある。

3 ここでの「文脈」という語は、近似的に言って、ドゥルーズとガタリが『哲学とは何か』における「内在平面」という章で論じた、「内在平面」という語でもって置き換えて理解することができる。逆に言えば、そこでの「内在平面」という語は、それが含む多くの含意を捨象してしまえば、われわれが理解していると思っているところの「文脈」という概念に近似することができるように思われる。しかし考えてみるべきはむしろ「文脈」というものが何であるのかわたしたちはほとんど知らないということであり、「内在平面」という語はそれが何であると考えうるのかということについて一定の解明を行っていることとみることができる。「内在平面」の解明については近藤和敬『ドゥルーズとガタリの『哲学とは何か』を精読する』講談社メチエ、二〇二〇年の第三部を参照されたい。

れぞれであれば細部はかなり異なっていることがほとんどであり、場合によっては正反対な極において対立することすらある。そしてその文脈は、実際にマテリアルとしては同一であるテキストの読みに対して、あふ心的な因果的効力を発揮するのであり、それによってその文脈は読み手にたいしてある読みを強制するように思われる。ここでの議論はすべて、一世紀以上の時間をおいた歴史的な事柄であるが、現代のわたしたちにとってもある重要な示唆を与える。第一に、現代のわたしたちがあるテキストを読む、あるいは読めると思われているとき、そのことを可能にしているのは、その読み手を捉えている文脈によるところがあり（もちろんそれだけではなく、テキスト内在的な要因も当然あるが）、したがって、読みはその文脈によって拘束されているところがあるという半ば自明のことである。第二の点は、そのような何某かの文脈は、当該のテキストが編まれたその同時代においても作用していたはずのものであることにかかわる。実際のところその文脈は、テキスト内在的には厳密に指定することが多くの場合困難である。そのため実証主義的な歴史研究によって、その文脈の強制力が浮き彫りにすることに重要性が見いだされることになる。そのこと自体は、否定するべくもないのだが、同時に、そのような同時代的な文脈が指定できたとして、今度はそのような同時代的な文脈の強制力から離れた別の文脈におかれることでそのマテリアルとしてのテキストが発揮したある種の生産性（これには誤解や誤読のそれと原理的に区別できないだろう）をどう評価するべきかという問題が生じることになる。この問題に対する当面の解決策は、テキスト内在的な意味の一義的解釈の不可能性を原則としつつ、マテリアルとしてのテキストと、それを読解することを促す文脈との二重原因を受け入

れたうえで、可能なかぎり文脈を明示化するという態度を促すことになるだろう。ひとつの文脈の共有は、厳密な解釈の進歩あるいは洗練を可能にするが、同時に新しい読解の生気を奪うものでもある。新しい読解は、結局のところ、他所からやってきた文脈のなかでそれを読解するという、余所者的で脱領土化的な行為を不可避なものとするのかもしれないが、読解の可能性が二重原因であることを肯定的に受け止めるのであれば、その逸脱も含めて肯定せざるをえない⁴。

本稿では、以上のことを前置きとして、実際に一八九〇年代前後のスピノザに言及しているテキストにみられる二つの文脈とその外部を析出することを目指す。それらの文脈は、その運動、軌跡、始点と終点、ある時点での速度と方向性のいずれをとつてもかなり異なる。それにもかかわらず、一八九〇年代の一時期、それらは確かに交差する。そして、実のところ本稿のもう一つの主題は、その交差する比較的大きな文脈の流れに一見すると乗っているかみえて、そこから逸れている一つの特異点を分析することにある。そしてこの特異点に注目することになるのは、最後に示すことになるように、そこにこそ実のところ、後に第二次スピノザ・ルネサンスによって、あるいはカヴァイエスによって示されるスピノザの位置によって反復されるところのものをみるからである。すなわち、スピノザ主義をめぐる二つの異なる文脈とそこから逸脱する特異点という構図それ自体に、二〇世紀以降のフランスでのスピノザ受容の原型をみてとるといふことである。

4 『哲学とは何か』の「内在平面」の章では、まさにこの問題が議論されており、彼らの解決もおおむねここでの方向性に一致している。

前史——ヴィクトル・クザンの

スピノザからイポリット・テーヌのスピノザへ

十九世紀前半のフランスでのスピノザ研究の文脈については『スピノザと十九世紀フランス』の他の論攷に譲りたいが、以下の議論で必要な範囲で関連する項目を列挙して確認しておきたい。

1 ヴィクトル・クザンとその弟子たち（とくにエミール・セッセの「批判的序文」）による読解の文脈。

2 フーリエ主義者らにおける「一者としての人類」という社会思想の文脈。

3 ドイツ思想における一事件としての汎神論論争の文脈。

これらに加えて、十九世紀半ばには、ここでは十分には扱わないが、高等師範学校の卒業生ながら、クザン派と敵対しつつ、オーギュスト・コントの実証主義とイギリスの経験哲学を吸収することで形成されたイポリット・テーヌの実証主義の文脈がある。この文脈は、あとでみる実証主義の文脈で頻繁に参照されるのだが、実際のところテーヌが複数の著作を通して、どれほどスピノザにコミットしていたかは慎重を期す問題でもある（少なくとも一八七〇年刊の『知性論』ではスピノザへの明示的な参照はないが、暗示的示唆は十分に見られる。）。おそらく

5 杉山直樹「テーヌのスピノザ主義」『ワークショップ十九世紀フランス哲学

学におけるスピノザの影その1——世紀前半』二〇一九年二月（学習院大学）『スピノザと十九世紀フランス』の同名の論文も参照。実証主義科学、とくに心理学へのテーヌの影響にとつて、テーヌの哲学におけるジョ

明示的な参照ということの問題にはなるのは、以下で引用する一八五六年刊の『ティトウス・リウィウスについて』の序文だろう。

スピノザ曰く、人間は自然のなかに「国家のなかの国家」として存在するわけではなく、ひとつの全体における部分として存在する。そして、わたしたちであるところの精神自動機械の運動はまた、それが含まれているところの物質的世界の規則と同じ規則によって支配されているのだ、と。「改行」スピノザは正しいのか。「正しいのであれば」批評において厳密な方法をもちいることができるのか。才能は定式によって表現可能なのか。植物の細胞組織のように、人間の諸能力は互いに支えあっているのか。その諸能力は、唯一の法則によって測られ、生み出されるのか。この法則が手に入ったあかつきには、その諸能力のエネルギーを予見し、その諸能力による善き結果と悪しき結果を前もって計算することができるのか。また自然科学者が動物の化石を組み立て直すように、その諸能力を組み立て直すことができるのか。わたしたちには、ある支配的な能力が存在し、その一意的な働きがわたしたちであるところの「精神自動機械の」異なる歯車にたいして異なる仕方で命令し、わたしたちであるところの「精神自動」機械に、予見された諸運動からなる必然的なシステムを課しているのだろうか。「改行」わたしはこれにたいして、そうである、とひとつの事例でもって答えようと思う。⁶

ンニスチュアート・ミルの役割は看過できないように思われる。

6 Hippolyte-Adolphe Taine, *Essai sur l'Intelligence*, Librairie Hachette et Cie, 1856pp. vii-viii.

一八九二年のルネ・ヴォルムス『スピノザの道徳——その原理とそれが現代におよぼした影響の検討』に至る、
実証主義におけるスピノザ受容の歴史的概観

ここでのテーヌのスピノザへのコミットメントの表明は、全面的なものであるように読めるのだが、しかしテーヌはこの著作の細部において、いちいちスピノザを引用することもなければ、『エチカ』の当該部分についてのいくらかの解釈が提示されることもない。ここでのテーヌの企てのポイントとなるのは、人文学と呼ばれるものの領域に、自然科学において期待されるような被法則性あるいは構造があることを示し、しかもおそらくは当の本人たちの自覚されないところで作動している構造とその構造を駆動する一意的原因を推定するところにある。このことはテーヌが試みた批評および歴史学だけにとどまらず、のちに社会学、犯罪学、人類学、心理学へと広げられていくことになるだろう。

一八九〇年代にみられるスピノザをめぐる二つの文脈とその外部

以上を前史として踏まえたくうえで、本稿の主題である一八九〇年代の議論に移ることにしたい。一八九〇年代は、多くのスピノザ論が様々な媒体によって集中的に提示された稀な時代だったと言える。具体的には、一八九二年刊でルネ・ヴォルムス(René Worms, 1869-1926)の筆による『スピノザの道徳 その原理とそれが現代におよぼした影響の検討』(精神科学・政治科学アカデミーによって賞が授与されている)、レオン・ブランシュヴィック(Léon Brunschvicg, 1869-1944)が一八九四年に出版した『スピノザ』(この著書も、ヴォルムスと同様に精神科学・政治科学アカデミーによって賞が授与されている。また後の一九二四年に増補され、『スピノザと同時代人たち』と改名し増補再版されることとなる)、そして一八九三年に出版されたヴァクトール・デルボスの『スピノザ哲学

における道徳問題とスピノザ主義の歴史における道徳問題』(以下『道徳問題』とする。この著書もまた上記受賞者を出したアカデミーのコンクールに応募した論文が元の原稿になっている。しかしこの論文には賞は授与されなかった)、そしておそらくこの時期に書かれたが断筆となり、その遺稿が弟子のエミール・シャルティエ(後のアラン)によって一八九五年の『形而上学道徳雑誌』上に発表されたジュール・ラニョー(Jules Lagneau, 1851-1894)による『スピノザについてのいくつかの注記』、そしてそのアランことシャルティエ(Emile Chartier, 1868-1951)によって一八九九年の『形而上学道徳雑誌』で発表され、翌年の一九〇〇年に出版される『スピノザ』へと続く論文「スピノザによる喜びの道徳的価値」である。

これらのなかで、ほとんど知られていないのはヴォルムスによる著作だが、後で見ると、これは先ほど言及したテーヌの実証主義の流れに属していると考えることができる。それにたいしてそれを除く四つは、すべて哲学分野の(正確には哲学の教育研究の分野で当時働いていた)書き手による著作であり、すべて『形而上学道徳雑誌』という

⁷ 細かいことを言えば、ブランシュヴィックはこの時期、ロレアン、トゥール、ルーアンのリセ・コルネイユなどで哲学教育に従事した後、一九〇〇年にソルボンヌに招聘された。デルボスは、トゥールーズ、ヴァンプのリセ・ミシュレなどの哲学教育を歴任した後、一九〇二年にソルボンヌ大学に講師として招聘された。ラニョーは、サンズ、サン・カンタン、ナンシーを歴任した後、デルボスがその後任となるリセ・ミシュレで哲学教育に携わった後、病により急逝。アランことシャルティエは、ポンティヴィーのリセ・ジョセフ・ロト、デュビュイ・ドゥ・ロームを経て、『スピノザ』の時期に、ブランシュヴィックの後任としてリセ・コルネイユに着任し、その後、リセ・ミシュレで教育にあたることになる。

二〇世紀初頭を特徴づける重要な雑誌の書き手からなる（この雑誌の性格については別稿で検討する）。したがって、この一八九〇年代のスピノザをめぐる動きを理解するうえで、まずは大きく二つの文脈を仮定することが有効であるように思われる。そしてこれら二つのうち、実証主義の文脈は、この一八九〇年代を境に徐々にその影が薄くなつていく一方で（ただし二〇世紀後半における理論社会学・社会思想史にみられるスピノザの影というものにその文脈を探すことはできるかもしれないが、しかしそれほどはっきりしたものではないように思われる）、哲学史の文脈はより鮮明になつていく。しかし、一八九〇年代のこの時期には、実証主義の文脈のインパクトはそれなりに大きくあり、哲学研究の側の文脈がそれを意識せざるを得ない状況だったことが考えられる。したがって、本稿では、実証主義の側の文脈を精査し、そこでのスピノザ哲学受容のあらましを把握することにした。

2. 実証主義の文脈におけるスピノザ

一八七〇年代から一八八〇年代の状況について

十九世紀後半に固有の一つの文脈として、イポリット・テーヌ以後の実証主義におけるスピノザがある。その源泉となるのは、すでに引用した『テイトウス・リウイスについて』の序文にあるだろう。この文脈におけるスピノザは基本的に、

8 別稿とは、本来この論文を前半として掲載することを意図した拙稿「ヴィクトル・デルボスによるスピノザ解釈の特異性」である。

一八九二年のルネ・ヴォルムス『スピノザの道徳——その原理とそれが現代におよぼした影響の検討』に至る、
実証主義におけるスピノザ受容の歴史的概観

自然主義—汎神論+決定論のスピノザ

という像を形成していると理解することができるよう思われる。ここでいう自然主義とは、人間（とくにそのモラルの側面）が、唯一の全体である自然の一部であることを強調し、結果的に実験心理学や犯罪人類学といった自然科学および実験科学によつて人間のとくに行為にかんする事柄を扱う方向性を正当化するさいにスピノザを援用する立場を指す。テーヌの場合には歴史的進展と民族性と芸術的才能の自然主義的実証性という方向性に議論が向かい、直接的にはモラルサイエンスの実証化という方に向かわない。しかし、テーヌに端を発する影響は、テーヌの著作自体以上に大きな流れを生み出していくことになる。

実際のところ、一八七〇年代には実証主義の文脈のなかでかなりの頻度でスピノザが陰に参照されることになる。すでに言及したテーヌによる『知性について』（一八七〇年）に加えて、後に詳しくみるテオデュール・リボーによる『現代イギリス心理学』（一八七〇年）が刊行され、当時イギリスで行われていた実験心理学の仕事をスピノザと結びつけながら議論されている。またイギリスのハーバード・スペンサーやジョン・スチュアート・ミルの影響を受けて実証主義に進んだイタリアの哲学者、ロベルト・アルデイーゴ (Roberto Ardigò, 1828-1920) による『実証科学としての心理学』（一八七〇年）が出版される。これについて後にアルフレッド・エスピナス (Alfred Espinas, 1844-1922) は、その『イタリアの経験哲学——その起源と現在の状態』（一八八〇年）において、

9 この点についての詳細は、『スピノザと十九世紀フランス』所収の米虫論文を参照されたい。

次のように述べている。

肝心なのは、もっぱら帰納法によって、これら二つのカテゴリー（物的なものとの心的なもの）のあいだの新しい類似を説明するものとして、ある上位のカテゴリーを構想することであつて、このカテゴリーは、これら二つの種類の現象が経験にたいして自らを示す限りにおいて、それらの共通の特性以外のものも含むことはないだろう。かくして人間は、二つの異なる実体ではなく、二重の側面をもつ現象を集めた唯一のものから形成されるものとして現れる。この構想はスピノザのそれであるのだが、アルディーゴ氏によるとスピノザのそれと大きくことなるところは、スピノザの実体が、学知の出発点としてアプリオリなものと考えられているのに対して、前者のものは単に、物質と精神を統合する寄せ集めを含意するのみであり、その進展とともに修正されるべく常に準備されている。⁹⁾

またこのように述べるエスピナス自身も、自身の主著となる『動物社会について』（一八七八年）の序文においてスピノザへの言及をおこなつてゐる¹⁰⁾。

一八七二年には、次節で論じるアルフレッド・フイエ (Alfred Fouillée, 1838-1912) が博士副論文として『自由意志と決定論』を提出

⁹⁾ Alfred Espinas, *La philosophie expérimentale en Italie : origines, état actuel*, Gerner Baillière, 1880, p. 109.

¹⁰⁾ この点についての詳細は、『スピノザと十九世紀フランス』所収の米虫論文を参照されたい。

し、そこでスピノザによる自由意志の否定の議論を取り上げ、実証主義の文脈に影響を与えることになる。この議論はさらに、先に触れたイタリア経験哲学の文脈において一八七八年に提出されるエンリコ・フェリ (Enrico Ferri, 1856-1929) による博士論文『帰責の理論と自由意志の否定』において、たとえば以下のように取り上げられる。

スピノザは、自由意志への信念が私たちの意志の結果の認識と意志を支配している法則の無知とに依存していることに注意したことはまったく正しい。(La teoria dell'imputabilità, 1878, 40)

この著作をもつて「イタリアの科学にとつて『真の事件』であり、自由意志が実在しないことを証明し、そのうえその非実在こそが刑法の基礎であることをも証明した」(Archivio giuridico, XXI, 1878; Braunstein 2007: 350) と評したのは、彼の師であるチェーザレ・ロンブローゾ (Cesare Lombroso, 1835-1909) であるが、そのロンブローゾ自身は、テーヌから影響を受けてスピノザに接近している。

このようななかで、テーヌと並ぶ実証主義者として、また『イエス伝』（一八六三年）で知られるエルネスト・ルナン (Ernest Renan, 1823-1892) がオランダのハーグで行われたスピノザ没後二〇〇年を記念して講演をおこない、そこにおいて哲学者スピノザ以上に、宗教者スピノザ、聖書解釈者スピノザ、つまり『神学政治論』の著者であるスピノザを前面に出した講演をおこなっている。あとで言及するヴォルムスはこの講演に言及しながら、ルナンの「道徳」を高く評価し、「ルナンの道徳は、

まさにスピノザ主義である」¹²と述べている。すなわち「人間にはただ一つの徳だけが、すなわち真理に深く根ざした愛だけが存在するのであり、実用的な徳はすべてこの愛に由来しているように思われるのだ」¹³と述べることになる。さらにヴォルムスは、このルナンの若き弟子であるモーリス・バレス (Maurice Barès, 1862-1923) が、ルナンに増して一層スピノザ主義的であることを指摘し、彼の観念小説である『自我礼賛』(第一巻が一八八八年刊、第二巻が一八八九年刊、第三巻が一八九一年刊)をその例として挙げている。

以上の概観からもわかるように、一八七〇年に始まり一八八〇年代へと続く実証主義の文脈のなかで、かなり頻繁に、しかしスピノザ解釈それ自体を伴わないままに(ルナンによるものを例外として)、スピノザが肯定的に言及されていることがわかる。以下では、このなかでも重要と思われるフイエとリボーについて少し立ち入って検討していくことにしたい。その際、時間的順序としてはフイエの著作のほうが先に出版されているにもかかわらず、フイエの議論はリボーののちの議論をある意味では論理的に先取りして批判していることから、リボーの議論を先に取り上げることにはしたい。

テオデュール・リボー『感情の問題』(一八八三年)の場合

ストレートに、人間の心理(道徳的側面)が、特に意識されない仕方で、自然の一部であることを主張する流れを、ここでは実証主義の主流

12 René Worms, *La morale de Spinoza : examen de ses principes et de l'influence qu'elle a exercée dans les temps modernes*, Librairie Hachette et Cie, 1892, 317.

13 *Ibid.*, 318.

一八九二年のルネ・ヴォルムス『スピノザの道徳——その原理とそれが現代におよぼした影響の検討』に至る、
実証主義におけるスピノザ受容の歴史的概観

派と呼称することにはしたい。たとえば、心理学者のテオデュール・リボー (Théodule Ribot, 1839-1916) の立場がそれであり、エスピナスが総覧的にまとめている『イタリア経験哲学』(一八八〇年)で言及される、アルディーゴ、ロンブローゾ、フェリなどがそれである。リボーによるスピノザへの言及の文脈は、決定論の側の根拠として催眠術が挙げられるという当時固有の状況に位置づけられる。ここで取り上げるのは、一八八三年に初版が出版されたリボーによる『意志の病』においてスピノザに言及される直前の議論である。そこで描かれる実験の一つはおおよそ以下のようなものである。催眠術師がある女性に催眠術をかけて、そのなかで夜の十時と夜中の三時に出かけようとするのに命じて通常の状態に戻す。女性はその時間帯になると出かけようとするので、同居人が止めようとするが、女性は適当な理由を自ら考案して(つまり行動の理由を自ら選択して)出ていくというものである。このような実験およびそれと似たようないくつかの実験について言及したあと、リボーは以下のように言うのである。

スピノザ曰く、「私たちの自由意志という幻想は、私たちを行為せしめている動機に対する無知でしかない」。先ほどのいくつかの事実とそこでの類似は、このスピノザの言葉を裏付けているのではないだろうか。¹⁴ (Ribot 1888: 146)

リボーの著作は、必ずしもスピノザの言葉を実証するとういうことに向

14 Théodule Ribot, *Les maladies de la volonté*, 5^e édition, F. Alcan, 1888, p. 146 [1^{er} édition, 1883].

けられているのではなく（実際、この著作でのスピノザへの言及は上記引用の一方所のみである）、彼らの心理学実験に基づく包括的な心理理論が先にあり、それとの類縁性においてスピノザが言及されるというものに過ぎない。ただし、その理論的な帰結は、たしかにスピノザのそれを想起させるには十分でもあった。実際、『意志の病』の結論部を見ると、人間の表象的な意識作用（何かを選択すること、欲すること、意志すること）は、「意識状態、潜在意識状態、無意識状態（純粋に生理的）のグループの多かれ少なかれ複雑な調整から生じる意識の最終的な状態であり、これらすべてが一緒になって行動や停止をもたらす」¹⁵のだとされる。つまり表象的な意識にそれが昇るよりもまえに、様々な神経生理学的な調整（これを彼は「熟議」と呼ぶが）を経て、その結果だけが、表象的意識にたいして、事後的に与えられるとされる。したがって、ここで表象的意識が何かを欲したように思ったとしても、「意志はどこまでも原因ではない」¹⁶と結論されることになるのである。

以上の引用において確認するべきは、一九世紀後半の神経生理学を基礎とした実験心理学において、このような形での決定論が論じられる傾向にあったということ（人間の行為に決定論が成り立つことは、それを対象とする自然科学が成立することに結びつくことになる）、スピノザの決定論と解された自然主義が結びついていたということである。そしてここで問題になるのは、もっぱら心理学者としてのスピノザであり、いわば『エチカ』第三部のスピノザだということである。

¹⁵ Ibid., 174.

¹⁶ Ibid., 174.

アルフレッド・フイエ『自由意志と決定論』（一八七二年）

フイエは、必ずしも実証主義の正統派には属していない。むしろのちに引用で確認するように、彼は実証主義を批判する側の立場にたっているのだが、それにもかかわらず実証主義心理学の知見の正しさを十分に評価するという意味で、またイギリスの経験論哲学であるスペンサーやミルを高く評価する点においてもフイエは実証主義の理解者であり続ける。その点で、実証主義と正面から対立するクザン派の残存勢力としてのエルム＝マリイ・カロ、ポール・ジャネ、そして別稿で言及するシャルル・ヴァダントン＝カステュス（Charles-Pendrell Waddington, 1819-1914）らによるセクト主義的な批判とは異なっている。

フイエの哲学は、人間心理の実証主義の方向性を受け入れつつも、「力観念*idea-force*」のような、非実証的概念に、人間の自由の根幹を位置付けようとする折衷主義的な流れを形成する系譜の源流を形成することになる¹⁷。たとえば一八七二年が初版（博士副論文として出版されたのが最初であり、その後版を重ねる）とされる『自由と決定論』はその方向性を印づける最初の一步であり、ここでは「モーズレイ、ヘルツェン、テーヌ氏、リボー氏」¹⁸らを主とする自然主義の学派を批判しながら、フイエは次のように述べている。

¹⁷ この系譜はそれほど多くの後継者を持たないが、彼の義子でもあるジャン＝マリイ・ギユイヨーに色濃く受け継がれることになる。

¹⁸ Alfred Fouillec, *La liberté et le déterminisme*, 3^e édition, F. Alcan, 1890, p. 235. (1^{er} édition, 1872).

この学派の弊害は、一般的に、良心や思想をほとんど重要視していないことである。私たちは、良心や思想を、それらなしで達成された運動の単なる反映（「反射」）であり、作用もなく、真の影響力もない単なる「発光現象」にしてしまうことを見てきた。（中略）彼らの誤りは、私たちに知られている、あるいは知られていない行為は、私たちが互いに追従する波を見ても見なくても、常に同じように流れる川に似た蛇行のままであると信じていることである。¹⁹

この批判からも想像されるように、ファイエは、「この波」を見る「観念」が、リボーらの議論とは異なっており、最終的な出力にたいしてある因果的作用力をもつということを主張することになる。²⁰

ファイエにとって、スピノザの決定論（ファイエの議論では運命論ともいわれるが、その間に理解の明確な違いを見出しにくい）は、論敵となるリボーらの立場を代表するものであると理解されるがゆえに、ファイエに
19 Ibid., 235.

20 ファイエとリボーらとの対立は、実際のところ、真の学問的対立というよりも、むしろ認知科学においてどのような理論図式を前提するかという対立とみるほうが適切なように思われる。ファイエの「力観念」を、現在の認知科学がいうところの「概念」あるいは「シミュレーション」とみるなら、かなりの部分を現在の認知科学の言葉でいえるように思われる（cf. リサ・フェルドマン・バレット（高橋洋訳）『情動はこうしてつくられる——脳の隠れた働きと構成主義的情動理論』紀伊国屋書店、二〇一九年）。その点でファイエとベルクソンのあいだの差異をさらに、認知科学と形而上学のあいだの差異にまで引き延ばすことができるかもしれない（cf. 木山裕登「ベルクソンとファイエにおけるオートマティスムの問題」『東京大学研究室』論集』三三三号、二〇一四年、四八—六一頁）。

とってスピノザは批判対象となる。ただし、ファイエの立場は、いわゆる自由意志論者の立場をも批判する形になっている（自由意志論者としてライプニッツの名が挙げられる）。決定論に対する批判は、微妙なものである。

これらの考察は、スピノザの問題を私たちにもたらす。すなわち、私たちに自由の観念を与えてくれるのは、行為の原因にたいする無知なかただろうか。²¹

ファイエが批判するスピノザ主義は、自由の観念（これはスピノザによって虚偽意識であるとされるわけだが）は、行為の原因に対する無知によって生じるとする立場である。つまりリボーらの立場である。そしてファイエはこれがスピノザ主義であるならば維持不可能であるという。なぜなら、「そもそも、自由という概念を生み出すのは、行為を生み出す原因にたいする無知ではなく、自発的あるいは意図的な決定の原因にたいする無知である」²²からだ。単に何となく決定されているけれどもその原因を知らないというだけでは、ひとは自由の観念を認めない。むしろ意図的に決定しているときに、かつその意図的な決定の原因を知らないときにかぎって、ひとは自由の観念をもつ、というのがファイエの反論である。

このような考えを私に与えることができるのは、私の決断の意識的

21 Fouillee, *La liberté et le déterminisme*, 8

22 Ibid., 8.

な理由に対する無知ではなく、様々な意識的な理由の間で、私にそのような決断をさせる原因に対する無知なのである。²³

つまり、互いに矛盾する帰結を導くような意識的な理由というのは同時にいくつもありえて、それらが様々な原因（性格や習慣など）によって調整しあい、混ざり合いながら、結果的にある決断が行われるということである。わたしたちはまさにその理由のあいだでの選別の原因を知らないのである（つまり意識された理由＝理性は意志あるいは決断をもたらさないとすることもある）。したがって、「私たちは、私たちの合意意識と呼ばれるものの分析意識をもつことができないので、このような深刻な状況下で何を望むかを自分自身で計算したり予測したりすることができない」²⁴。この決断の原因にたいする無知、すなわち自分のことであるにもかかわらず、予めの予測から逃れた自由意志こそが自由の観念を与えるというのがフイエの立場である。そしてこの無意識的決定の根幹にあるのが、「欲求 appetit」であると言われる。

欲求とは、あらゆる生物を生み出し、活動させるものであり、生命そのものである。しかし、欲求の法則は、現実のものであると表面的なものであると、最大の善に向かうものであり、それは楽しみと幸福をもたらす傾きをもつ。²⁵

ここに至って、この「欲求」は、それでもスピノザの「コナートゥス」とは言われなくてもかわらず、そのように読んでしまふ可能性をすでに示しているように思われる。フイエの議論とリボー的な自然主義的決定論との違いは、単純かつ客観的決定論ではなく、その根幹に生命そのものの非決定性を含む表面上の（しかし認識論的には不可避な）決定論（というよりも、合理的理由のあいだでの決断の原因の無知）という点にある。また、リボーとの立場との違いという点については、フイエが強調しているのは、単に下からの決定論ではなく、上からの観念による反省作用との複合的な原因の調整によって、かつ、その最終的な傾きは、それぞれの原因には還元されない、「欲求」という原初的な生の事実性によって与えられるというものである。言いかえれば、ブランシュヴィックにおいて「判断」と呼ばれることになる（ヘルクソンにおいては「一般観念」などとも呼ばれる）次元の半ば自律した精神（フイエにおいては「観念」）の働きに注目するという点にその特徴がある²⁶。

いずれにせよ、このようなフイエ流の「生」概念をどう解釈するかが、表面上のフイエによるスピノザ批判の解釈の困難となるが、さしあたりこの点はひとまず置いて、先に進むことにしたい。

実証主義の文脈におけるスピノザの末路
—— ルネ・ヴォルムス『スピノザの道徳』（一八九三年）

テーヌからリボーへと続く自然主義の主流派の流れを受けながら、²⁶ 26 しかし、この点は、実際のところ、経験論的な観念論にたいして、悟性の自律した働きを強調するカントの認識論の關係の反復をみることもできるだろう。

23 Ibid., 9.

24 Ibid., 10.

25 Ibid., 255.

れを人間集団、つまり社会の次元でそれを確認しようとする流れがある。この文脈をよりはっきりとさせると同時に、ある意味でデュルケームとの学問政治に負けたことで、その終止符をも印づけることになったのが、ルネ・ヴォルムス (René Worms, 1869-1926) の一八九二年の著作『スピノザの道徳——その原理とそれが現代におよぼした影響の検討』だと考えることができる。ヴォルムスの社会思想はもっぱら実証主義をベースとして構成されており、彼の社会学の根本構想であるところの「社会有機体論」²⁷も、この実証主義と社会学の創始者であるコントからルナンへ、あるいはリトシからエスピナスへと続く実証主義の文脈から導かれ、発展したものだともみることができる²⁸。この社会有機体論と自然主義のスピノザとの関係は無視することができない。一八九六年に公刊される『有機体と社会』においてヴォルムスは、社会有機体論のコント以後の先行理論家として、先に述べたファイエの『現代社会科学』(一八八〇年)とハーバード・スペンサーの『社会学原論』(全四巻、第一巻は一八七四年、仏語訳が一八七六年)をエスピナスらの著作と共にあげており、特にスペンサーについては同著において多くの参照を見出すことができる。そして『スピノザの道徳』の第五章「一九世紀のイングランド」では、主にスペンサーがスピノザ主義者として紹介されている(しかし、この奇妙さは、同年に出版されるデルボスの『道徳問題』

で、おそらくはヴォルムスを読むことなしに批判され、この通説の出どころとして後に注39で触れることになるギュイヨールの記述を引用しながら、事実無根として批判している²⁹)。したがって、ここにおいてもやはり決定論としての自然主義の文脈を確認することができるだろう。

『スピノザの道徳』においてヴォルムスが論じているスピノザの〈像〉について確認しておこう。彼のスピノザ論がアカデミーによって評価され受賞することになったのは、(その学術政治的背景をいったん括弧に入れるなら)コント以来の実証主義哲学の文脈にあつて (Worms 1892: 314-315)、テーヌ以来の「必然性」の哲学 (Worms 1892: 315) としてのスピノザという像を一貫して提示し、その範囲で論題であるスピノザの道徳という問題について明快に(つまりは評者の期待通りに)答えたからだと考えられる。ヴォルムスは「道徳 moral」と「倫理 *etique*」のあいだに明確な区別をせずに、そのあいだで断りなしに概念を横滑らせていることに、まずはその特徴をみることができる³⁰。そのうえでヴォルムスは、「道徳 moral」を無前提的に「実践」の知であるとしたうえで、スピノザを引用しながら、道徳とはすなわち人間の「精神」*ame*の完全化の学³¹であると主張する。そしてこれこそが、スピノザの名著『エチカ』の第三部から第五部にかけての内容であり、したがって、「道徳問題の探求」³²こそが『エチカ』後半部分における中心的な内容であったのだと彼は主張することになる。

27 René Worms, *Organisme et société*, V. Giard et E. Brière, 1896.

28 cf. Roger Geiger, Marie-France Essyad, Philippe Besnard, « René Worms, l'organicisme et l'organisation de la sociologie », *Revue française de sociologie*, 1981, 22-3. *Sociologies françaises au tournant du siècle. Les concurrents du groupe durkheimien*. Etudes réunies par Philippe Besnard. pp. 345-360.

29 この点については注39を参照されたい。

30 Worms, *La morale de Spinoza*, 27.

31 *Ibid.*, 29.

32 *Ibid.*, 26.

ヴォルムスの解釈の根底にあるのは、道德と形而上学と自然科学という三つの「科学Sciences」のあいだの連続的關係である。まず形而上学と道德のあいだには重要な循環的關係が描定される。というのも、形而上学は道德をその科学としての「目的」とする一方で、道德は形而上学なしには構築されえないと彼は主張するからである。その一方で、道德にたいしては副次的とされるその他の諸科学は、道德に「方法」を課するという仕方でも道德を支える。ヴォルムスによれば、スピノザ以外の多くの哲学者は、自然学と論理学と道德を方法的にも領域的にも区別するのだが、スピノザはそれらを全く区別しないことにその特徴があるとされる。³³

スピノザにとつて、概念可能なものはすべて実在である。実在であるものすべてはそれが実在する限りにおいて完全である。物理学は論理学に差し戻される。そして道德は物理学に差し戻されるがゆえに、それを媒介して論理学にも差し戻される。魂の完全化の学つまり道德は、魂の存在の学つまり心理学とは何ら異なる本性には属していない。ところで心理学は、今度は物理学の本質と同じものになる。そして物理学はもはやそれらの論理的存在の学つまり幾何学と何ら異なるところはない。かくして漸次的に、道德の方法は幾何学の方法に差し戻されるのである。これこそがスピノザが『エチカ』のなかの有名な一節によって主張しているところのことである。(以下『エチカ』第三部序文からの引用)³⁴

以上の引用からヴォルムスのスピノザ哲学解釈の文脈が、必ずしもスピノザ哲学それ自体から採用されているわけではないということがわかる。そこに見いだされるのは、むしろ実証主義哲学に共通する哲学観に他ならない。しかしその一方で彼の主張は一貫しており、かつ簡潔である。「スピノザは道德のなかに科学を、ただし他のどの科学よりもより高次の、しかし同じ本質と同じ方法に属する科学を認めるのみである」³⁵。この主張こそ、まさに道德と形而上学と科学を実証主義の立場から統一せんとする文脈に根差したスピノザ解釈の典型を示す文言であるとみることが出来る。先に少し触れたように、『スピノザの道德』でも、ヴォルムスの社会学に多大な影響を与えていたスペンサーが再三触れられ、それがスピノザ主義として論じられている。たとえば、それは次のような文言として現れる。

スピノザが説明しているところのこの自由という觀念の発生と、ハーバート・スペンサーが説明しているところの道德的な善という觀念の発生とのあいだにある類比的關係に注意せよ。³⁶

このようにして、チャールズ・ダーウィンという若干科学性に欠ける奇妙だが冒険的な先駆けは、ある意味で、スピノザの「静的」汎神論とハーバート・スペンサーの「動的」汎神論のあいだの移行を形成しているのである。確かにスピノザを想起させるには、スピノ

³³ Ibid., 28.

³⁴ Ibid., 29.

³⁵ Ibid., 31.

³⁶ Ibid., 45.

ザのことをスペンサーはよく知らないように思われる。しかし彼の学説のあいだにある類比的関係は、彼らが負っているものの結果というよりも、出会いの結果なのである。³⁷

スペンサー氏は、スピノザと同様に真の汎神論者であり、単なる自然主義者ではない。というのも、彼が「認識可能な」事実の裏には、「認識不可能な」実体 *substance* があることを認めているからだ。³⁸

これらの決定的な引用が示していることは、ヴォルムスが何でもつてスピノザを読もうとしていたか、ということである。すなわち彼は当時フランスにおいて絶大な影響力をもっていたスペンサーの実証主義的哲学でもつてスピノザを読もうとしたのであり、むしろそれでもつてスペンサーの哲学を、ひいては実証主義それ自体を単なる自然主義を越えたある形而上学的な汎神論にまで格上げしようという壮大な試みだったということになる。このようなヴォルムスの観点は³⁹、ある意味では、

37 *Ibid.*, 260.

38 *Ibid.*, 306.

39 このようなヴォルムスの「スペンサー＝スピノザ」という解釈は、おそらく彼の独創ではない。またこのような論点は、堅実なテキスト解釈という観点からは擁護することができない。この点について、デルボスは『スピノザの道德問題』の第二部の最後の二章で、イギリスにおけるスピノザ主義について論じる箇所で言及している。イギリスのスピノザ主義において問題になるのは、先に論じたフイエとその義子であるジャン＝マリー・ギユイヨーによるスペンサーと同一視したスピノザである（スペンサー＝スピノザという解釈がさらにヴォルムスにおいて、しかしフイエとギユイヨー

フイエのように、機械論的自然主義をスピノザにみつづ、それを越える観念の審級に哲学の可能性を擁護するという試みにたいする、実証主義の側からの応答だとみることでもできる。すなわち、実証主義哲学の源泉（あるいはむしろその完成者）をスペンサーにみることによって、それを参照せずに反復されるのだが、デルボスの議論においてはヴォルムスの著作には触れられていない）。ここでは例えば以下のような仕方でもギユイヨーの議論がまとめられ、批判が展開されている。

「ハーバート・スペンサー氏は一種の実証主義者スピノザであるが、その違いは、存在の永続性の原理を深め、そこから一群の進歩の原理を引き出すことである」（Jean-Marie Guyau, *La morale anglaise contemporaine. Morale de l'utilité et de l'évolution*, 2^{me} édition, F. Alcan, 1885, p. 205）「スペンサーの〈認識されないもの〉もスピノザの〈実体〉も、善悪の相対的で純粋な人間的区別を無限に超え出ている。知恵は、スペンサーにとつても、スピノザにとつても、無限の力を顕在化させる秩序を受け入れることから成り立っており、したがって、一方にとつても、他方にとつても、人間の自然な目的は、自然的必然性によって措定され、保証されている。以上のような比較はすべて、スピノザにおいて何が主要で支配的な要素であるのかということを軽視しているからこそ可能なのである。（Delbos, *Le problème moral*, p. 486）

つまり、ギユイヨーによるスペンサーとスピノザの同一視は、スピノザ哲学の根本的な誤解に基づくとデルボスは批判していることになる。それにもかかわらず、ヴォルムスの著作では、フイエはもちろん、ギユイヨーについても、スペンサーとスピノザを同一視する論点において参照されていない（これとは異なる論点ではそれぞれ一度ずつ参照されているので、読んでいないということはないように思われる）。

ここに単なる機械論的自然主義にとどまらない哲学の可能性それ自体を位置付けようというものである。そしてその際の参照項が、自然主義において参照されてきたスピノザで、そのスピノザを形而上学的汎神論として再解釈することによってこの目的を達成するということになる。ところがそこでいう汎神論とは、何であり、そう主張する正当性はどこにあるのか、という問題が当然生じることになる。おそらくはここでヴォルムスが想定しているのは、テーヌからスペンサーへと続く、実証主義のなかで実証主義それ自体を越えて形而上学へと進もうとする動きを指しているのだと考えられる。しかし問題はそれが本当にスピノザと結びつくのかということだろう。

ヴォルムスのこの著作に続いて、社会学の文脈のなかでの（むしろ社会学者による）スピノザという薄い流れが、二〇世紀に入っても、エミール・ラスバクス (Emile Lasbax) のような社会学者が、その最初の習作として⁴⁰、スピノザの哲学を扱うということが行われることになるように⁴¹ (Emilie Lasbax, *La Hiérarchie dans l'univers chez Spinoza*, Félix

40 ラスバクスのこの著作はドゥルーズの『スピノザと表現の問題』でとくに新プラトン派の流出説とスピノザの内説が比較されるところで重要な参照文献となるのだが、ラスバクス自身は哲学者というよりも社会学者で、ヴォルムスが創刊した『国際社会学評論誌』のディレクターでポルドー大学のデュケームのポストの後継だったガストン・リシャール Gaston Richard, 1860-1945 (ラスバクスの師でもある) の後継者として知られる。
41 ラスバクスの仕事は、根本的に新プラトン主義への関心を中心として「それを社会と国家の問題へとつなぐものである」といえる。以下の著作があげられる。
『悪の問題』 *Le Problème du mal*, Paris, Librairie Félix Alcan, 1919°

Alcan, 1919° Georges Friedmann, *Leibniz et Spinoza*, Gallimard, 1946など) しばらくの間、しかし弱々しい仕方ではあるが続くことになる。しかしスピノザの影響という水脈は、基本的にはデュルケームとその一派の台頭によって（アルチュセール、マトウロン、ゲルー、ドゥルーズらによる第二次スピノザ・ルネサンスにいたるまでのあいだ）、マイナーなものへと退いていくことになるだろう。

文献表

Emilie Lasbax 1919, *La hiérarchie dans l'univers chez Spinoza*, Librairie Félix Alcan, 1919.

Alfred Espinas, *La philosophie expérimentale en Italie : origines, état actuel*, Gerner Baillere, 1880.

Théodule Ribot, *Les maladies de la volonté*, 5^e édition, F. Alcan, 1888 (1^{er} édition, 1883).

『スピノザにおける宇宙の階梯』 *La Hiérarchie dans l'univers chez Spinoza*, Paris, Librairie Félix Alcan, 1919, 1926°

『北アフリカの哲学—アフリカ精神の歴史』 *La Philosophie dans l'Afrique du Nord et l'histoire de l'esprit africain*, Paris, Librairie Félix Alcan, 1922°

『宇宙の弁証法とリズム』 *La Dialectique et le rythme de l'univers*, Paris, Librairie philosophique J. Vrin, 1925°

『人間国家——弁証法的社会学試験論第1巻：社会学的システムの歴史』

『人間国家——弁証法的社会学試験論第2巻：社会の運動学、生態学、力学』 *La Cité humaine. Esquisse d'une sociologie dialectique. T. 1 : Histoire des systèmes sociologiques et T. 2 : Cinématique, statique et dynamique sociales*, Paris, Librairie philosophique J. Vrin, 1927.

『フランスは第三帝国になるのか』 *La France ira-t-elle à un Troisième Empire ?*, Paris, Direction générale de Droit et de Jurisprudence, 1936.

- Alfred Fouillée, *Science sociale contemporaine*, Hachette, 1880.
- Alfred Fouillée, *La liberté et le déterminisme*, 3^e édition, F. Alcan, 1890 (1^{er} édition, 1872).
- Georges Friedmann, *Leibniz et Spinoza*, Gallimard, 1946.
- Roger Geiger, Marie-France Essyad, Philippe Besnard, « René Worms, l'organicisme et l'organisation de la sociologie », *Revue française de sociologie*, 1981, 22-3. *Sociologies françaises au tournant du siècle. Les concurrents du groupe durkheimien*. Etudes réunies par Philippe Besnard, pp. 345-360.
- Jean-Marie Guyau, *La morale anglaise contemporaine. Morale de l'utilité et de l'évolution*, 2^{me} édition, F. Alcan, 1885.
- Emile Lasbax, *La Hiérarchie dans l'univers chez Spinoza*, Félix Alcan, 1919.
- Hippolyte-Adolphe Taine, *Essai sur The Live*, L. Hachette, 1856.
- René Worms, *La morale de Spinoza : examen de ses principes et de l'influence qu'elle a exercée dans les temps modernes*, Librairie Hachette et C^{ie}, 1892.
- René Worms, *Organisme et société*, V. Giard et E. Brière, 1896.
- Alexandre Matheron, « Les deux Spinoza de Victor Delbos », *André Tosel, Pierre-François Moreau, Jean Salen, Spinoza au XIX^e siècle*, 2008, pp. 311-318.
- Moreau, Jean Salen, *Spinoza au XIX^e siècle*, 2008, pp. 311-318.
- リサ・フェルドマン・バレット（高橋洋訳）『情動はこぼれこぼれされる——脳の隠れた働きと構成主義的情動理論』紀伊国屋書店、2019年。
- ヴァンサン・デュクレール（富原真弓、佐藤紀子訳）「19世紀転換期フランスにおけるスピノザの思想と民主的知識人の誕生」『思想』no. 1091、二〇一五年、九二-一六頁。
- 木山裕登「ベルクソンとフイエにおけるオートマティスムの問題」東京大学研究室『論集』三三三号、二〇一四年、四八-六一頁

一八九二年のルネ・ヴォルムス『スピノザの道德——その原理とそれが現代におよぼした影響の検討』に至る、
実証主義におけるスピノザ受容の歴史的概観